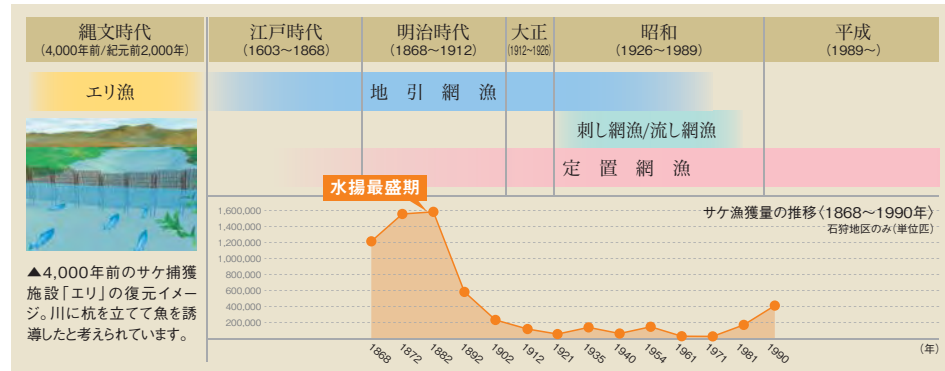


【年表と写真で見る、石狩・サケ漁の変遷】



▲4,000年前のサケ捕獲施設「エリ」の復元イメージ。川に杭を立てて魚を誘導したと考えられています。



▲蝦夷国漁場風俗図巻(江戸時代/北海道開拓記念館所蔵)



▲石狩海浜鮭漁業(明治34年/『殖民公報』第五号より)



▲地引網でろくろを巻く様子(昭和30年代)

地引網を使って大量のサケを獲るようすが、蝦夷鮭とともに全国に広がり、「アイヌの住む蝦夷地」資源豊かな「蝦夷地」というイメージが生まれました。石狩のサケ漁の全盛期は明治十年代で、年間百五十万匹近いサケが捕獲されていました。そのため石狩のサケ地引網漁は、北海道の水産業の象徴として教科書や修学旅行に取り上げられ強い印象を残しました。戦後、石狩川が環境が悪化したことにより石狩のサケ漁も厳しい時代を迎え、江戸時代以来続けられた川での地引網漁も禁止されました。しかし、近年の水質環境の改善とサケ資源の増殖事業によりサケ漁は回復し、現在は石狩湾新港沖で定置網漁が行われています。



SEA SIDE OF ISHIKARI, HOKKAIDO.

況 實 業 漁 の 岸 海 狩 石 道 海 北

▲北海道石狩海浜の漁業実況(明治~大正/絵葉書より)

4,000年前から受け継がれる

石狩とサケ漁の歴史

きつてもきれいな
石狩とサケの歴史

かつてサケの産卵場所は、ほとんどが石狩川の支流にあり、そのため膨大な数のサケが石狩川河口を通過して故郷を目指しました。縄文人やアイヌの人々は、石狩川に戻ってきたサケを支流の小さな川で「エリ」(デシ)と呼ばれる仕掛けを使って捕え、乾燥させて保存食としました。これは「乾鮭(カラサケ)」と呼ばれ、中世には「蝦夷鮭」として知られていました。江戸時代になり、和人たちが乾鮭より塩引のサケを好むようになると、石狩川の本流や海岸部でサケ漁が行われるようになります。和人たちは地引網の技術をアイヌに伝え、大量のサケを獲るようになります。アイヌが大きな